

たといそうでも

【聖書】ダニエル書3章13～30節

これを聞いたネブカドネツアル王は怒りに燃え、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを連れて来るよう命じ、この三人は王の前に引き出された。王は彼らに言った。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、お前たちがわたしの神に仕えず、わたしの建てた金の像を拝まないというのは本当か。今、角笛、横笛、六絃琴、豎琴、十三絃琴、風琴などあらゆる楽器の音楽が聞こえると同時にひれ伏し、わたしの建てた金の像を拝むつもりでいるなら、それでよい。もしも拝まないなら、直ちに燃え盛る炉に投げ込ませる。お前たちをわたしの手から救い出す神があるか。」

シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツアル王に答えた。「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってください。そうでもなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。」

ネブカドネツアル王はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴに対して血相を変えて怒り、炉をいつもの七倍も熱く燃やすように命じた。そして兵士の中でも特に強い者に命じて、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴを縛り上げ、燃え盛る炉に投げ込ませた。彼らは上着、下着、帽子、その他の衣服を着けたまま縛られ、燃え盛る炉に投げ込まれた。王の命令は厳しく、炉は激しく燃え上がっていたので、噴き出る炎はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴを引いて行った男たちをさえ焼き殺した。シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は縛られたまま燃え盛る炉の中に落ち込んで行った。

間もなく王は驚きの色を見せ、急に立ち上がり、側近たちに尋ねた。「あの三人の男は、縛ったまま炉に投げ込んだはずではなかったか。」彼らは答えた。「王様、そのとおりでございます。」王は言った。「だが、わたしには四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている。」ネブカドネツアル王は燃え盛る炉の口に近づいて呼びかけた。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは炉の中から出て来た。総督、執政官、地方長官、王の側近たちは集まって三人を調べたが、火はその体を損なわず、髪の毛も焦げてはならず、上着も元のままで火のにおいすらなかった。

ネブカドネツアル王は言った。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をたたえよ。彼らは王の命令に背き、体を犠牲にしても自分の神に依り頼み、自分の神以外にはいかなる神にも仕えず、拝もうともしなかった。この僕たちを、神は御使いを送って救われた。わたしは命令する。いかなる国、民族、言語に属する者も、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をののしる者があれば、その体は八つ裂きにされ、その家は破壊される。まことに人間をこのように救うことのできる神はほかにはない。」こうして王は、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴをバビロン州で高い位につけた。

【序】信仰の証

ダニエル書第1章では、捕囚になってバビロンに連れて行かれたダニエル達4人の少年が、宮廷の豊かな食事を食わず、野菜と水だけで3年間を過ごして、他のどの少年よりも秀でた青年に成長し、王のそば近くに仕えるようになった信仰の強さを学びました。第2章では、繰り返し見る夢に恐れをなし、心が混乱した王の諮問に答えて、その夢の意味を明快に解いたダニエルが、彼の前にネブカドネツアル王の方が思わずひれ伏して「あなたたちの神は、まことに神々の神、すべての王の主」と言わせています。そして今日の第3章は、ダニエルの3人の友人シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの信仰の証です。

【1】燃え盛る火の炉を畏れない信仰

王は自分の絶大な権力を誇るために、都の近くの平野に高さ27m、幅2.7mの巨大な金の像を建

て、楽器の合図とともに、家来はいうに及ばず、諸国、諸族、諸言語の人々も皆ひれ伏して拝むように命じました。拝まない者は直ちに燃え盛る炉に投げ込まれます。しかしシャドラク、メシャク、アベド・ネゴは拝もうとしませんでした。ユダヤ人でありながら高い地位についている彼らを妬む家来たちは、早速3人を中傷して王に訴えました。

王は怒りに燃え、彼らを呼び出して申しました。「もし拝まないなら、直ちに燃え盛る炉に投げ込ませる。お前たちをわたしの手から救い出す神があるか」。しかし3人は静かに きっぱりと答えました。「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉の中から、わたしたちを救うことができる神さまです。また王よ、あなたの手からわたしたちを必ず救ってくださいます。たといそうでなくても、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません」。

ネブカドネツアル王は血相を変えて怒り、炉をいつもの七倍も熱く燃やすように命じて、彼らを、上着、下着、帽子等の衣服を着けたまま縛り上げ、7倍も熱くした燃え盛る炉に投げ込みました。ところが間もなく王は驚いて立ち上がり、叫びました。「四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている」。

王は燃え盛る炉の口に近づいて呼びかけました。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい」。炉の中から出て来た3人を調べましたが、火はその体を損なわず、髪の毛も焦げてはおらず、上着も元のまま火の匂いすらしません。ネブカドネツアル王は言いました。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をたたえよ。彼らは王の命令に背き、体を犠牲にしても自分の神に依り頼み、自分の神以外にはいかなる神にも仕えず、拝もうとしなかったため、この僕たちを、神は御使いを送って救われた。わたしは命令する。いかなる国、民族、言語に属する者も、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの神をののしる者があれば、その体は八つ裂きにされ、その家は破壊される。まことに人間をこのように救うことのできる神はほかにはない」。こうして王は、彼らをバビロン州で高い位につけたのでした。

シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは絶大な権力を誇る国王に向かって、「神さまは、燃え盛る炉の中から私たちを救い出すことがお出来になる方です。ですから王の手からも必ず救ってくださいます。しかしたといそうではなく、この身が焼き殺されるとしても、それは神さまがそうお考えになってなさることですから、それをよしとして受け入れます。神さまに対する私たちの信仰は変わりません」と言い切っています。何と素晴らしい信仰でしょうか。私たちの多くは、目先の危機から逃れる手段として、神仏に手を合わせて、助けを祈り願います。かなえられなければ、信じるに値しない神仏、無力な神仏と見限り、他の宗教に移っていきます。どちらが真の信仰でしょうか。

[2] 日本人が神の名でやったこと

去る15日は我が国の敗戦記念日でした。政府主催の全国戦没者追悼式での安倍首相の式辞には、「加害責任についてふれていない」と新聞は大きな見出しで報道していました。私は先週福

岡新生教会の世界宣教リバイバル聖会に出席して来ましたが、そこで日本の朝鮮支配で**殉教を遂げた牧師**の息子さんが書いた、両親が拷問された記録を読みました。今日の週報の巻頭言に一部分を紹介しておきましたので、ぜひお読みください。

ここでは、40年前によく読まれた**安利淑**さんの自伝「たといそうでもなくとも」(待晨社)の初めの部分をご紹介します。ダニエル書と丁度同じ事件が起こったと書き始めています。

「あの時と同じように、日本人はその**八百万(やおよろず)の神々**を偶像化して、それを全東亜に強制的に広めるために、都市や郡や村々にまで一番高くよい場所に日本の**神社**を建てて、官吏たちに強制参拝させた。そして学校や官庁や各家庭に至るまで、**神棚**を配り、強制的に拝ませた。ついには**教会の聖壇**にまで神棚が置かれた。クリスチャンたちが礼拝する前に、先ず日本の神棚に最敬礼をさせるため、刑事を教会に配置した。日曜日になると各教会で刑事達が鋭い目を光らせて、信者の行動を監視していた。時には制服の警官が聖壇に上って見下ろしながら、煙草を口にくわえて目を光らせていた。

もし牧師が反対するか、不遜な態度に出たら、すぐに引き立てて行き、耐えきれない拷問にかけて半殺しにするのであった。そしてその家族には配給を全然やらずに飢えさせ、虐待を重ねていく。このために人心は乱れ、弱い者は日本人の犬となって、日本人よりももっと悪辣になり、強い者は殺された。一般民は日本人を**悪魔**のように恨み、呪うようになった。———気をつけ！まことの生き神さまであらせられる**天皇陛下**と、**天照大神**(あまてらすおおみかみ)と、**皇大神宮**、**八百万の神**に向かって最敬礼！」。安さんは女学校の教師として集団参拝の時に最敬礼せず、彼女の逃亡生活が始まったのでした。

この本の序文で酒枝義旗先生が、「**信仰と不信仰の戦いこそ世界史最大のテーマだ**」というゲーテの言葉を引用してこう述べています。「神は**実在**して**歴史の歩み**を導き、また信じる者一人ひとりの**生涯を顧みたもう方**であるのか、それともキリスト信者だけが抱いている一種の**信念**、または**思想**に過ぎないのか。この本は数千年前に**アブラハム**を選び導き給うた神が、今もなお変わることなく信じて従う者を、どんな時にも愛し、慰め、教え、導き、すべてを益にして下さる**生ける神**であることを、数々の体験を通じて証している。」

[3] 国王によって造られる神々

ダニエル書の2章では、ネブカドネツアル王が、何度も見る夢に不安になり眠れなくなりました。ダニエルはその夢の示す意味を明快に解き明かしました。それは「王国が次々と起こっては滅びていくこと、しかし歴史の終わりには、すべての国を滅ぼして**永遠に続く国**を天の神は興される」という神のお告げでした。それを聞いて王は、ダニエルの前にひれ伏して、「あなたたちの神はまことに**神々の神**、すべての**王の主**」と告白しています。

それなのに続く3章では、巨大な金の像を建てて、全ての家来、諸国、諸族、諸言語の人々にひ

れ伏して拝めと命令を下しています。これはバビロン王の絶大な権威の前に皆がひれ伏し、絶対服従せよという命令です。手中の権力をいつ奪われかと怯える権力者の姿が透けて見えます。そして金の像を造って神として拝めと命じるのですから、その神は王によって造られた神ということになります。権力者によって造られ、権力者に利用される神々。王の家来の一人に過ぎない神。なんと安っぽい神でしょうか。

朝鮮民族を支配した日本の国家権力も、全家庭、全教会の聖壇にも神棚を置かせ、「気をつけ！まことの生き神さまであらせられる天皇陛下と、天照大神(あまてらすおおみかみ)と、皇大神宮、八百万の神に向かって最敬礼！」と礼拝を強制しました。世界各地の権力者によって次々を造られていく神々ですから、八百万の神なのですね。シンガポールでも占領すると直ちに皇大神宮の分社・昭南神社を建て、全ての宗教指導者も含めて、参拝を強制しました。ですから日本が負けると真っ先に、跡形もなく壊されてしまいました。

その上、その神を拝まない者を燃え盛る火の炉に投げ込むことをさせる神とは、何と非情、残酷な神なんでしょうか。今日の週報巻頭言にも紹介しました、殉教者朱牧師夫妻を拷問に処した警察官に、このような行為をさせた天皇という生き神さま、天照大神とは、何という残酷・非情な神なんでしょうか。天皇は、天皇という名がアジア各地でどのように残酷・非情な行為を人々にさせたかという責任を自覚しているのでしょうか。また現在日本国の総理大臣という地位にある安倍さんも、東条英樹に代表される総理の名の下で行われた、数々の恐ろしい行為の責任を継承していることに気付いているのでしょうか。

酒枝先生は、神は果たして実在者なのか、あるいは信者の信念、あるいは思想なのかと問いかけています。神さまは、昔アブラハムを選びお召になった時「祝福の源となるように。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」(創世記 12:2~3)とおっしゃいました。神さまは、地上のすべての氏族を祝福される神なのです。その神さまがナザレのイエスとしてこの世に生まれて歴史の実在者となり、貧しい者たちに寄り添って生きて下さり、十字架刑に処せられて死に、墓より復活して天に戻っていかれました。私たちはこのお方を、ご自身を世に啓示された神キリストと信じます。

イエスキリストは「私は良い羊飼いである」「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」また「私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ 10 章)とおっしゃいました。神さまは、私たち一人ひとりの命を豊かにして下さるために、ご自分の命も捨ててくださいました。それが十字架の死です。神さまとはこのように、ご自分の命まで捨てて、私たち一人ひとりに命を豊かに与えてくださるお方なのです。自分を拝まないからといって殺したり、残酷な拷問にかけたりする神とは、全く正反対のお方です。どちらが真の神でしょうか。天皇も天照大神も巨大な金の像も、それを建てた国王も、神ならざる神です。

[結] 真の愛を分け合う

良い羊飼いイエス・キリストはおっしゃいました。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊

もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」(ヨハネ 10:16)。この囲いに入っている羊とは、現在イエスキリストを自分の羊飼いと信じて教会という囲いに属している信者でしょう。しかし世界には教会に属していない人々が大勢います。

全ての民を祝福する神・イエスキリストの目と心は、その人々にも注がれているのは当然です。そしてその人々が命を豊かに受けるためにも、ご自分の命を十字架で捨ててくださったのでした。そして「その羊もわたしの声を聞き分ける」と言い切っておられます。十字架に現された神の愛の呼びかけは、世界中のどんな人にも聞き分けられると、神さまは確信しておられるのです。

神の名のもとで、人々を痛めつけ、服従させていく神は、神ではありません。この世の権力者に利用され、操られている偽の神です。僕の姿をとり、国籍、宗教、地位を問わず、苦しむ者、悲しむ者、病む者、貧しい者、弱い者、虐げられている者たちに寄り添い、慰め、助け、癒して下さるお方こそ、真の愛の神さまです。

言葉が違う、文化が違う、宗教が違う——これが世界を一つにしない根本原因です。どうしたら共通理解が持てる世界が生まれるのでしょうか。しかし人は皆、真の愛を求めています。人と共に愛を分け合って生きる喜びを求めています。どんな人でも、そのような命の飢え渴きを心の底に抱いているのではないのでしょうか。世界は共通しているのです。

「その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」。ご自分自身を十字架にはりつけにして、世界のすべての人に、豊かな命を生きる者にして下さる愛にこそ、全世界の人々の心を包んで、一つにする力があると、主イエスは確信しておられるのです。

私たちクリスチャンも、十字架を掲げて、人々を弾圧し、殺してきています。羊飼いの命と全く相反する行為を繰り返して、敵を作ってきました。今こそ一人ひとりが、十字架の愛にしっかりと立たなければなりません。世界の何処へでも出て行って、そこに暮す人々と十字架の愛を分かち合い、共々に神の羊の群れを作って参りましょう。

完